The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜Book Review＞KNAUDT, Till , Von Revolution zu Befreiung : Studentenbewegung, Antiimperialismus und Terrorismus in Japan, 1968-1975
Author(s)	周, 雨霏
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 49-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68053
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【書評】

KNAUDT, Till, *Von Revolution zu Befreiung: Studentenbewegung, Antiimperialismus und Terrorismus in Japan, 1968–1975**
（ティル・クナウト『革命から解放へ：日本の学生運動・反帝国主義・テロリズム 1968-1975』）

周 雨 霏

1

「動乱の 1968 年」から 40 周年にあたる 2008 年には，ドイツ語圏の近現代史学界そして公共圏においては，1960 年代の学生運動を，国境を越える思想史・運動史の文脈のなかで再検討しようとする書物が，非常にたくさん出版された。そこには，「グローバル・シックスティーズ」という，現在にもつながる議論の潮流を見て取ることができるだろう。だが，社会運動の国際的相互連関・相互影響を重視する潮流がそのようにもてはやされているにもかかわらず，ドイツ語圏では，1960 年代から 70 年代にかけて日本で生起した左翼学生を担い手とする若者の運動に関しては，クラウディア・デーリヒス『日本の新左翼：社会運動と院外野党 1957-1994』（Claudia Derichs, *Japans Neue Linke: soziale Bewegung und ausserparlamentarische Opposition, 1957-1994*, Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1995）以降，包括的な検討はおろか，個別的なテーマを扱う研究さえ，稀にしか見受けられない。

本書は，著者が 2014 年にハイデルベルク大学に提出した同題の博士学位論文をもとにした著書である。学生運動とその余波に着目する気鋭の若手研究者としての著者は，共産主義者同盟赤軍派（1968～1970）と東アジア反日武装戦線（1971～1975）という二つの代表的な武闘派左翼団体の理論と行動を手がかりとして，いわゆる「ポスト 1968 年」時代の日本に現れた左翼過激派の思想と運動をいかにトランスナショナルな視点から読み直すかという問いに答えることを試みる。評者はこの方面の思想史・運動史に詳しいわけではないので，叙述の細部の妥当性を実証的に検証する準備はない。そこで，以下では，全体の内容を概観的に紹介したうえで，若干のコメントを加えることにより，書評の責めを塞ぐこととしたい。

---

* KNAUDT, Till (2016) *Von Revolution zu Befreiung: Studentenbewegung, Antiimperialismus und Terrorismus in Japan, 1968–1975* (Globalgeschichte Band 22). Frankfurt a. M.: Campus.

2

本書の構成は次の通りである。

第 1 章　序論
　第 1 節　「中心」から「周縁」へ：研究方法と視座
　第 2 節　日本における「1968 年」：先行研究と依拠する資料
第 2 章　ネオ・マルクス主義，反帝国主義と学生運動
　第 1 節　共産主義，合法政党と学生（1945-1955）
　第 2 節　日本におけるネオ・マルクス主義
　第 3 節　反帝国主義と「第三世界」の発見
　第 4 節　戦後資本主義のなかの学生たち
第 3 章　世界革命：赤軍派における反帝国主義
　第 1 節　「世界中にレッド・アーミーを展開させよう！」：赤軍派における反帝理論と学生武闘派グループ
　第 2 節　キューバとあのハイジャック事件
　第 3 節　赤軍派の後継組織
第 4 章　革命的主体の転換：新左翼におけるマイノリティとプレカリアート理論
　第 1 節　釜ヶ崎の日雇労働者と革命家たち
　第 2 節　新左翼とマイノリティ
　第 3 節　北海道，アイヌ，そして反日主義の誕生
第 5 章　「ネーション」からの解放：反植民地主義と東アジア反日武装戦線
　第 1 節　マルクスと決別する時がきた！ 赤軍派と反日主義
　第 2 節　東アジア反日武装戦線
終章　革命から解放へ

第 1 章は，本書の視座とアプローチを明らかにする。1960 年代を通じて，日米安全保障条約の締結（およびその延長），ベトナム反戦，沖縄返還，大学学費値上げなど内外の出来事をめぐって，学生を中心とする若者の反抗運動が高揚していた。ところが，70 年安保での敗北をターニング・ポイントとして，新左翼の各グループは従来の革命観と闘争理論から離脱していき，社会運動の領域においても新たな運動理論と運動形態が登場し始めた。このような 1970 年前後に起きた社会運動のパラダイム転換を捉えるうえでは，デーリヒスの前掲書と小熊英二『1968』（上下 2 巻，新曜社，2009 年）がもっとも重要な先行研究であると著者は指摘しており，本書でも随所で参照されている。著者は，デーリヒス前掲書は新左翼組織の構造という側面から「ポスト 1968 年」時代における社会運動の脱政治的な性格

を論じていて社会科学的な性格が強く，小熊の前掲書は「1970 年パラダイム」というタームを用いて運動に関わった若者たちの心情を考察しつつ上述した転換を解釈しようとしている，とする。そのうえで著者は，両者とは異なる観点に立って，歴史研究者の立場から，「1970 年パラダイム」の来歴を，国境を越える同時代の思想史的文脈のなかに求めている。赤軍派と東アジア反日武装戦線という二つの過激な武闘派左翼グループを実例としながら，著者は，「革命的主体の問題」と「知的・人的なグローバル要因」という二つのアスペクトを軸にして，彼らの指導理論および行動をめぐって議論を展開するのである。

第 2 章では，「ポスト 1968 年」の前史として，60 年代に新左翼学生の間で多大な影響力を持ったネオ･マルクス主義と反帝国主義という二つの思想系譜について論じられている。日本におけるネオ・マルクス主義にアプローチする際，著者が学生運動のなかで最も重要な役割を果たした思想的業績であると評価しているのは，梅本克己の「批判的マルクス主義」と吉本隆明の「共同幻想論」であり，それを手がかりとして，ネオ・マルクス主義がいかに運動と連動したかを整理している。ヴィクター・コシュマンとリッキー・カーステンの先行研究に依拠しつつ，著者は，梅本と吉本による古典的マルクス主義の批判的継承が，学生たちを従来の経済的基盤を重視する階級的見解から「真の人間」として解放する役割を果たしたという見解を示して，私有制の打倒を目的とする従来の無産階級革命路線から人間関係に基づく「直接行動」への転換においてこの二人の思想家は重要な意義を持ったと評価している。

そして著者は，『理論戦線』『共産主義』『世界革命運動情報』など革命的学生の間で広く読まれた機関誌を手がかりにして，60 年代の学生運動における「反帝国主義」という概念の意味の変容を考察している。運動の前期においては，レーニンの民族・植民地論が広く受容され，「第三世界」の解放闘争は社会主義革命の一環と認識されていたのに対して，60 年代後半にフランツ・ファノンの著書をはじめとするポスト・コロニアル理論が舶来されるにつれて，新左翼運動を担う学生たちは古典的マルクス主義の階級闘争論から離脱し始め，第三世界の解放そのものを目的とする新型の反帝国主義が現れた，と著者は指摘する。このような「革命目的」の転化が，赤軍派の掲げる「世界革命」から東アジア反日武装戦線の反日テロ行為への転換と深く関わっている，というのが，著者の主張である（73 頁）。

本章において，著者は多くの紙面を費やして，1960 年代における新左翼運動の経緯を紹介している。その詳細にはここでは立ち入らないが，羽田闘争と佐世保事件における機動隊と新左翼学生との衝突の激化とその影響に関する著者の解釈は興味深い。著者は，のちの赤軍派の綱領との関わりに関して，次のように述べている。1967 年当時，反ベトナム戦争，反アメリカ帝国主義といった思潮が高揚するなか，学生たちにとって機動隊は「帝国主義の手先」という象徴的な意味を持っていた。彼らと機動隊との衝突は，⑴新左翼主義的革命闘争，⑵反戦主義・反帝主義，⑶大学からの離反，という三重の意味合いを持つことになる以上，国家機構に対する武装抵抗として正当化されてしまう（91 頁）。このような

機動隊と対峙する伝統は，全共闘運動が終焉したあとも，赤軍派によって継承された，というのが，著者の解釈である。

「世界革命：赤軍派における反帝国主義」と題する第 3 章は，赤軍派の綱領と行動を考察して，彼らの言動を 1970 年前後に運動理論や運動実践が大きく変容していく背景のなかに位置づけることを試みたものである。著者は，通説を継承して，大菩薩峠事件を赤軍派におけるターニング・ポイントと捉え，1969 年「秋の敗北」の教訓を汲んで学生運動時代の革命理念および闘争形態と決別したとし，その時点から，赤軍派のメンバーは，国内でのゲリラ戦の限界を認識し，「労働者国家」と旧植民地国家との連携を通じて世界革命を実行しようという「国際根拠地論」を方針として打ち出したとする。ただし，著者は，そのような「方向転換」によって赤軍派が「第三世界」，すなわち資本主義世界システムの「周辺」を意識的に見ていたのはたしかであるとしても，彼らは植民地解放運動そのものに対して特別な関心をもっていたわけではない，という点を指摘するのも忘れない（147 頁）。なぜなら，赤軍派にとっての革命は，戦闘的な前衛党が率いる社会主義革命であり，「革命的主体」はプロレタリアート階級にほかならなかったからである。経済的下部構造に規定されて社会は支配階級と被支配階級に二分されるという古典的なマルクス主義の社会認識に立つかぎり，世界革命を賃金労働者の資本家に対する抗争と捉えることになるのは不可避であるから，マイノリティに対する差別，日本のアジアに対する侵略と搾取，そしてジェンダー問題など，1970 年代以降に噴出してくる問題に対する洞察力を彼らが欠いていたのは，ある意味では当然のことであったと言える。

本章における塩見孝也の思想，そして赤軍派の具体的な行動に関する紹介について，ここで繰り返すことは避けるが，そのなかで著者が赤軍派の「国際性」にあらためて着目している点も，読者の興味を引く。周知のように，赤軍派およびその後継組織の政治理論と革命行動は顕著な国際的志向をもつため，先行研究においてもよく国際比較の観点から彼らの言動が取り上げられている。とくに 1969 年秋の「東京戦争」および「大阪戦争」は 10 月にシカゴで起こった一連の暴動に呼応するために組織されたという見方が一般的である。ここで著者は，赤軍派の発行物だけでなく，インタビュー取材から得られた情報も用い，当時の赤軍派がすでにウェザーマンと人的繋がりを持っていたことを実証しようとしている。また，大菩薩峠事件後，赤軍派がキューバへ送り出した生田あい，小俣昌道，中野綾子らのキューバ経験を取り上げて，彼らの「労働者国家」に対する無知や行動のナイーブさを指摘している。

1970 年前後以後，社会全体の改革を目指す革命理論は世界規模で退潮し，マイノリティ差別，環境問題など，単独の課題をめぐる社会運動（single-issue movement）が顕著になってくる。日本では，部落民や民族的マイノリティへの差別，戦争責任問題，日本のアジアへの経済進出，そしてジェンダー問題など，それまで注目されてこなかったテーマが浮かび上がってくる。第 4 章においては，若宮正則や船本洲治など釜ヶ崎の活動家，華僑青年

闘争委員会，そして「アイヌ解放同盟」の言動を手がかりにして，武闘派新左翼が如何に革命的主体を変化させつつ,反日主義にたどりついたかについて論じられている。著者は，それらの運動の経緯を詳細に整理して，70 年代の社会運動において，組織された労働者階級の代わりに，「ルンペン・プロレタリアート」，在日外国人，部落民，第三世界の窮民など，民族的・社会的「マイノリティ」が運動の主役になっていくという，「1970 年パラダイム」と類似する観点を導入している。

なかでも，のちに東アジア反日武装戦線と深く関わっているのは，太田竜をはじめとする「アイヌ解放同盟」周辺の活動家たちの思想である。著者は「アイヌ史の復興と反日主義の誕生」という一節を設け，「侵略者日本人」という自己認識が，いかに新左翼運動のなかで内在化されつつテロリズム的反日主義に帰結したかについて論じている。太田竜は，すでに 60 年代にフランツ・ファノンに傾倒し，『白い皮膚，黒い仮面』における同化政策への批判を積極的に取り込んでいた。彼にとって，打倒すべき対象は，支配体系としての日本語や日本的価値観・アイデンティティのみならず，むしろ植民地あるいは「内国植民地」を周辺化させた近代文明そのものであった。ここで，著者は太田竜が掲げた原始共産主義（バーバリズム）を象徴する「辺境」（frontier）への回帰がもつ空間論的転回（spatial turn）に着目して，それが従来の都市部における武闘派左翼の街頭闘争から，辺境最深部の解放運動への路線転換にとって決定的な意味をもったと論じている。

太田竜の「辺境の解放」に立脚する反日主義と，元赤軍派幹部梅内恒夫による日本の（戦前から一貫する）アジア侵略についての「贖罪意識」を受容し，70 年代前半に一連の過激な行動を起こした東アジア反日武装戦線の理論と行動は，社会運動全体が「1970 年パラダイム」へと移行するなか，テロリズムとして現れる行動の一つのパターンを示す，というのが，第 5 章の主要な論点である。著者は東アジア反日武装戦線のリーダー格の人物である大道寺将司の獄中書簡と彼の蔵書目録を分析対象として，大道寺にとっての解放運動が，日本国内の流動的下層労働者とアジアの抑圧された人民を主体とする反日闘争にほかならないと指摘して，興亜観音・殉国七士之碑爆破事件から三菱重工爆破事件にいたるまでの過激テロ行為を大道寺の思想的コンテクストに即して説明している。そのうえで著者は，赤軍派と対照しながら，東アジア反日武装戦線の持ついくつかの特徴的な性格を指摘しているが，その詳細はここでは省略する。著者が東アジア反日武装戦線の行動原理の誤謬として指摘しているのは，次の 2 点である。1 点目は，大日本帝国による植民地支配・アジア侵略の歴史が，つねに当面の問題の解決にも持ち込まれるという，歴史感覚の錯誤であり（302 頁），2 点目は，彼らが構築してきた「加害者＝日本人」vs.「被害者＝（北海道や沖縄も含む）アジア人民」という対立図式は，加害者と被害者を民族的基準でもって振り分けることで，日本の「単一民族国家」神話に加担してしまうという錯誤である（305 頁）。

終章においては，赤軍派を代表とする武装闘争路線から東アジア反日武装戦線のテロリズムへの転換を，その思想的なコンテクストのなかで再解釈する試みが行われている。著

者の観点からすると，この転換は，たんに国家権力に対する左翼組織の暴力の過激化としてのみ理解すべきものではない。それはむしろ，世界規模で戦後のネオ・マルクス主義，反帝国主義，そしてポスト・コロニアル理論などの新たな思想潮流が現れるなかで起こった，古典的マルクス主義に基づく革命理論からの離脱と捉えられるべきものであるとされる。流動的下層労働者，部落民，在日アジア人，先住民としてのアイヌなどが，新たに「革命の主体」として構成され，「革命の空間」が，都市・文明・帝国主義の中心から周辺に移動するなかで，マルクスが提示した近代社会像―資本家とプロレタリアートという二大階級が対立する社会像―の有効性は失われ，そのかわりに，社会をさまざまな民族的・社会的アイデンティティをもつ集団の集合と捉えるポスト・モダンの社会像が広く受容されるようになった（335 頁）。1968 年から 1975 年という短い期間における日本新左翼の理論上および運動実践上の変容は，以上のような思想的場面に照らしてみると，まさに同時代の世界で起こっていたモダンからポスト・モダンへの転換が引き起こした思想的な危機の集中的な噴出と捉えるべきものであるというのが，本書の総括である。

3

ドイツ語圏の日本研究においてこれまで注目されることのほとんどなかった赤軍派と東アジア反日武装戦線に光を当て，この二つの組織の思想と行動をグローバルな思想的転換の文脈のなかで再解釈した点は，本書の大きな貢献である。なかでも著者が，赤軍派とウェザーマン，ブラックパンサー党など同時代の左派との人的繋がりや思想的連動を探し求めて，実証的に検証しようとしている点は，示唆に富む。しかしながら，本書を読んで違和感を覚えた点も少なくない。以下，おおまかに 2 点に整理して述べる。

まず，一点目は，思想史と運動史の関係づけ方についてである。序章において，著者は，上述した二つの組織を「1968 年から 1970 年代前半にかけて，世界規模で生じた思想的な断絶」（12 頁）を代表する事例と捉えたうえで，「武装闘争における思想・理論生産の役割を明らかにしようとする」（17 頁）と述べている。つまり，本書は，思想の観点から運動史を読みなおす作業ではあるが，思想史の研究ではないはずである。しかし，本書では，運動史の研究史整理は，思想史の研究史整理と比べると，明らかに手薄であるという印象を否めない。具体的に言えば，著者は運動の担い手となる重要人物が残したテキストを丹念に読解し，それらのテキストにおける古典的マルクス主義の継承や同時代左翼思潮との接続を見事に指摘しているのに対して，運動史に関する叙述は，狭義の研究とは呼びにくい先行文献（たとえば高沢皓司の新左翼運動に関する一連の著作や，松下竜一『狼煙を見よ：東アジア反日武装戦線“狼”部隊』など）によるかたちで時系列的になされているにすぎない。そのため，抽象的かつ理想化されたイデーがどのようにして具体的な行動に転化したのかはわかりにくい叙述になっている。そもそも，実際の運動は，抽象的な指導理論より，客観的な

条件や，当事者の心情などによって規定されるところが大きい。そういう意味では，思想と運動の連関のあり方をめぐっては，もう少し慎重な理論的検討が必要であったかもしれない。

次に，二点目は，グローバル・ヒストリーとの関係についてである。本書は，セバスチャン・コンラットをはじめとするドイツの歴史研究者たちが編集しているシリーズ「グローバル・ヒストリー」シリーズの 1 冊である以上，新左翼過激派の歴史をトランスナショナルな枠組のなかで読みなおす志向性を持つのは当然のことであろう。実際，著者は，日本の運動家たちがどのようなかたちで古典的マルクス主義やポスト・コロニアル理論など舶来の「近代思想」あるいは「ポスト・モダン思想」を受容したかについては，多くの紙幅を費やして詳細に論じている。しかしながら，一国の事象に焦点を絞り，その事象をグローバルな同時性のなかに位置づけるだけで，グローバル・ヒストリーと銘打つことには，評者は疑問を感じざるをえない。水島司の手際のよい整理によれば，グローバル・ヒストリーの特徴としては，⑴扱う時間の長さ，⑵対象となる空間の広さ，⑶非ヨーロッパ世界の歴史の重視，⑷異なる諸地域間の相互関連の重視，⑸従来扱われてこなかったテーマの探求，などを挙げることができ，しかも⑴～⑷と⑸の間には因果関係がある。つまり，グローバル・ヒストリーへのパラダイム転換とは，これまで構想されてこなかった規模の時間的・空間的広がりを構想しつつその関係性を問うことによって新たな問題意識が生起してくる，ということである。しかし，本書は，序論で述べられているように，「日本における新左翼の思想・運動史をポスト・モダン時代の誕生という大きな物語の中に埋め込」（31 頁）むことを目指しているのだとすると，グローバルなコンテクストが踏まえられているのは確かであるとしても，本書の問題意識は依然として「新左翼の思想・運動史」の再評価という従来の伝統的な枠組にとどまっていると言わざるをえないのではないだろうか。

とはいえ，ドイツ語圏の読者が日本の新左翼過激派の言動を「ポスト・モダン時代への移行」という思想的コンテクストのなかで理解するうえで本書が大きな意義を持っていることは間違いない。本書がドイツ語圏の日本研究者に広く読まれるとともに，日本においても積極的な読者が現れることを期待したい。